昭和文学全集

34

評論随想集Ⅱ

小学館

昭和文学全集

34

評論随想集Ⅱ

小学館

昭和文学全集
第34巻

平成元年一一月一日　初版第一刷発行

著者——吉田満・他

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館
〒一〇一—〇一東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替 東京八—二〇〇番
電話 編集・〇三—二三〇—五一三六
業務・〇三—二三〇—五三三三
販売・〇三—二三〇—五七三九

印刷——大日本印刷株式会社
製本——大日本印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

Printed in Japan ISBN4-09-568034-2

©SHOGAKUKAN 1989

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

9 吉田満 戦艦大和ノ最期 より

18 丸山真男 歴史意識の「古層」

47 橋川文三 乃木伝説の思想
——明治国家におけるロヤルティの問題

58 戦中派とその「時間」

60 鶴見俊輔 大衆小説に関する思い出

65 『鞍馬天狗』の進化

80 安田武 修業以前

88 色川大吉 歴史と人間の運命

95 尾崎秀樹 歴史に裏切られた庶民たち

106 日本における歴史文学の特質
——私の歴史文学観

111 針生一郎 竹久夢二とその時代

118 石牟礼道子 五月（「苦海浄土」より）

129 岡本太郎 伝統とは創造である

139 武満徹 吃音宣言＝どもりのマニフェスト

149 吉田秀和 モーツァルトのコンチェルト

155 シューマン『はじめての緑』

163 クレーの跡

169 遠山一行 ドクトル・ユーパリノス
——音楽の古典性について

175 バッハの音

177 会話の音楽

180 白洲正子 石の寺

185 丹生都比売神社

190 ドナルド・キーン 三島由紀夫論

209 E・サイデンステッカー 川端康成

219 『源氏物語』を訳し終えて

225 山本七平 政治が宗教になる世界
234 奥野健男 太宰治論 より
255 原っぱ・隅っこ・洞窟の幻想 ——都市の中の原風景
277 服部達 未来への脱出路
285 劣等生・小不具者・そして市民 ——第三の新人から第四の新人へ
295 村松剛 死と現代
315 栗田勇 一遍上人 より
332 福田宏年 永遠と現実
343 川村二郎 走るやさしさ——上田秋成
355 伝説と小説——折口信夫
366 内田百閒論 より
380 チャンドスの城 より
388 秋山駿 イッポリートの告白
408 石塊の思想
417 詩人の秘密——中原中也の日記をめぐって
433 高橋英夫 引用と再現
453 リアリティの神話
467 疾走するモーツァルト より
476 鉱脈の閃き——ノヴァーリス
478 演奏家としての小林秀雄
480 伝承としての漢文
482 松尾芭蕉の故郷を訪ねて
485 磯田光一 永井荷風 より
511 「小学唱歌」考——その一世紀の帰趨
522 私の十七歳
523 私の精神主義
525 ニーチェと三島由紀夫 ——ディオニソスの使徒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

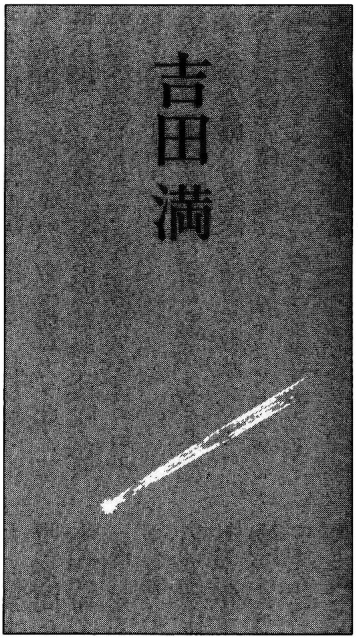
528 毒について——拝啓スウィフト殿
531 西欧派としての橋川文三
533 桶谷秀昭 保田與重郎 より
562 種村季弘 ゲーテ対カリオストロ
577 球体詩人のメランコリア
586 わが池袋序説 文学における「都市」の発見
590 悪魔博士の正体
598 出口裕弘 ロートレアモンのパリ より
604 粟津則雄 或る手紙
610 意識と物 ランボオとマックス・エルンスト
619 表現の危機
628 饗庭孝男 精神と化した石造空間
634 喚起する《織物》
——古典と現代文学をつなぐもの
648 平岡篤頼 持続と閃光
656 《私》の中の《自分》
664 宮川淳 鏡について*
668 ルネ・マグリットの余白に
671 引用について
678 菅野昭正 見つつ観ざりき——北原白秋論
699 清水徹 ナルシスの夢想
707 書物としての都市 都市としての書物
712 寄せ集め細工（バッチ・ワーク）について
——ゴダールの『気狂いピエロ』から
715 読書のユートピア
——あるいは読書の悪徳について
723 阿部良雄 言葉・都市・自然——森有正先生に
734 渡辺守章 虚構の祭——演戯空間の根拠
740 仮面と風景
745 渡辺広士 野間宏「青年の環」

756 渡辺一民 岸田國士論 より
769 杉本秀太郎 洛中生息
775 ペレアスとメリザンド
780 芳賀徹 かなしい遠景——ビアード博士と朔太郎
789 平川祐弘 西洋文明との出会いの心理
——森鷗外の『洋学の盛衰を論ず』
800 高階秀爾 近代美術における伝統と創造
811 中村雄二郎 コモン・センスとはなにか
817 想像力の訓練——R・バルトのロヨラ論にふれて
820 山口昌男 黒い「月見座頭」
827 民俗と周辺的現実
832 金子兜太 個性と詩性——蕪村の評価を追って
840 前登志夫 谷行の思想
847 塚本邦雄 夕暮の諧調 西行
853 岡井隆 現代短歌の存在理由——自己検証の試み
862 馬場あき子 鬼の研究 より
871 寺山修司 市街詩手稿
879 鮎川信夫 詩と政治と表現の自由
——パステルナークに関連して
891 安東次男 秘すれば花
895 雪のゆふぐれ
901 飯島耕一 詩のイメージ——瀧口修造を中心に
913 谷川俊太郎 手帖Ⅰ
922 詩へのめざめ
924 世界へ！——an agitation
929 紅野敏郎 志賀直哉——文体そのままの死
932 千葉亀雄・「新感覚派」の名づけ親
934 田中貢太郎と井伏鱒二
936 保昌正夫 横光利一全集抄
941 年譜勉強

943 三好行雄 枯野の詩人――「枯野抄」の意味
948 竹盛天雄 独身・一人旅・表現者
950 『黒髪』全二十三章という読み方
952 津藤の「姉」と「妹」
――鷗外と芥川の出会い
955 吉田凞生 「道草」――作中人物の職業と収入
962 小田切進 失われた小さな日記
――北村透谷「透谷子漫録摘集」
975 谷沢永一 紙つぶて より
982 前田愛 『柳橋新誌』の意味するもの
993 野口武彦 花の名は人めきて――萩原広道
1005 亀井秀雄 口惜しさの構造
1017 入江隆則 新井白石 闘いの肖像 より
1027 西尾幹二 「西洋化」への疑問
1036 池内紀 ビリヤードの球と蜥蜴のしっぽ
――あるいは諷刺について
1047 柄谷行人 マクベス論――意味に憑かれた人間
1071 川西政明 評伝高橋和巳 より
1079 松本健一 沈黙のはてに――竹内好追悼
1082 近代精神の悲劇 夏目漱石2
1088 川本三郎 「都市」の中の作家たち
――村上春樹と村上龍をめぐって
1099 三浦雅士 物語の行方
1107 コピーという呪文
1109 作家アルバム
1117 解説 三浦雅士・今村忠純・高橋英夫・清水徹・篠弘
1150 用字用語について

評論随想集 II

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



よしだみつる　1923～79、東京生まれ。小説家。東大法学部在学中、学徒出陣で海軍に入団。副電測士として戦艦「大和」の乗員となり、その特攻出撃に随う。終戦後、小林秀雄の推輓により『戦艦大和ノ最後』を発表、三島由紀夫の絶賛を博す。日本銀行勤務の傍ら「臼淵大尉の場合」などを執筆。

戦艦大和ノ最期　より

作戦発動

午後、出港準備作業　再ビ入港ヲ約束セザル出港ナリ

水上機一機、舷側附近ニ着水セルヲ認ム

身ノ廻リ品ヲ定メラレタル戦闘配置ニ置ク

前檣頂（ゼンショウチョウ）ニ近ク艦橋直下ノ上部電探室　上甲板ヨリ「ラッタル」ニテ百十段、水面ヨリ三十三米ノ高サナリ

コレヨリ如何ナルコトアルモ配置ヲ下ラザルベシ

電探兵器ノ作動極メテ良好

サキノ水上機、艦隊上空ヲ旋回ノノチ、東方ニ飛ビ去ル

大軍艦旗、前檣頂ニ翩翻（ヘンポン）タリ

「大和」ハココニ戦闘準備ヲ完了ス

最後ノ出撃ニ乗組ム栄ニ浴セルモノ、総員三千三百三十二名

一六〇〇（四時）出港　「両舷前進微速」

艦隊針路百二十度

旗艦「大和」　第二艦隊司令長官伊藤整一中将坐乗

コレニ従ウモノ、第二水雷戦隊所属ノ九隻

巡洋艦「矢矧」以下、駆逐艦「冬月」「涼月」「雪風」「磯風」「浜風」「初霜」「朝霜」「霞」

コトゴトク百戦錬磨ノ精鋭ナリ

日本海軍最後ノ艦隊出撃ナルベシ　選バレタル精強十隻

コノ寸刻ニ、「大和」ヲ敵艦ニ想定シテ、各艦襲撃訓練ヲ行ウ　問然スルトコロナシ

「大和」中心ノ輪型陣ヲ布キ、原速（十二ノット）ニテ悠々豊後水道ヲ直進ス

対潜掃蕩隊（ソウトウタイ）トシテ徳山ヨリ先導セル駆逐艦「花月」「榧」「槇」、反転シテ帰路ニ向ウ

精気ヲ秘メテ、真白キ波濤（ハトウ）ヲ嚙ム僚艦

矢ハ放タレタリ

交代シテ哨戒（ショウカイ）直ニ立ツ　哨戒当直ノ将校ナリ

艦ノ心臓カツ頭脳タル艦橋ノ中央ニ勤務シテ、艦内十六箇所ニ配置セル見張員ヲ掌握シ、ソノ報告ヲ取捨選択シテ艦長以下ノ各幹部ニ復誦（フクショウ）直結スルヲ任務トス　警戒航行中最モ重要ナル当直ナリ

右二米ニ長官（中将）、左一米ニ参謀長（少将）　新参ノ学徒兵トシテ、コノ身ノ幸運ヲ想ウ

「大和」、舷側ニ横波ヲ蹴立テテヒタスラニ進ム

艦体構造ノ無類ノ耐波性ニヨリ動揺全クナク、艦橋ニアレバサナガラ大地ニ立ツ如キ錯

覚ヲ起ス
今ゾ我ラ十隻ヲ貫ク一筋ノモノ、コノ潮流ヲ
冒シテ驀進ス

一八〇〇（六時）総員集合　清装
最後ノ総員集合ナラン　解散セバヤガテ戦闘
配備ニ就キ、再ビ集合ノ機会ナシ
タダ各配置ニアッテ、渾然一体ノ戦力発揮ヲ
期スルノミ
スデニ作戦発動セルタメ、艦長、艦橋ヲ離ル
ル能ワズ
副長代ッテ、聯合艦隊司令長官ヨリ艦隊宛ノ
壮行ノ詞ヲ達セラル
「帝国海軍部隊ハ陸軍ト協力、空海陸ノ全力
ヲ挙ゲテ、沖縄島周辺ノ敵艦船ニ対スル総攻
撃ヲ決行セントス
皇国ノ興廃ハ正ニ此ノ一挙ニアリ
ココニ特ニ海上特攻隊ヲ編成シ、壮烈無比ノ
突入作戦ヲ命ジタルハ、帝国海軍力ヲ此ノ一
戦ニ結集シ、光輝アル帝国海軍海上部隊ノ伝
統ヲ発揚スルト共ニ、其ノ栄光ヲ後昆ニ伝エ
ントスルニ外ナラズ
各隊ハ其ノ特攻隊タルト否トヲ問ワズ、イヨ
イヨ致死奮戦、敵艦隊ヲ随所ニ殲滅シ、モッ
テ皇国無窮ノ礎ヲ確立スベシ」
美文ナリ
皇居遥拝　君ガ代奉唱
軍歌　各艦相呼応シテ谺ノ如シ
万歳三唱
清明ナル月光、仰ギ見ル前檣頂　我ラ何ヲカ
言ワン

解散シテ一番主砲右舷ノ「ハッチ」ヲ下リン
トスレバ、前方錨甲板ニ佇ム士官ヲ認ム
太キ眉ノ影、月ニ冴エシ頬ニ落チタル横顔ハ
森少尉ナリ
艦内随一ノ酒量、闊達ノ気風ヲモッテ聞エ、
マタソノ美シキ許婚者ヲモッテ鳴ル彼　常ニ
肌身ヲ離サザル写真ノソノ美貌ト、シバシバ
届ク便リノ水茎ノ鮮カサトハ、カネテ一次室
全員ノ羨望ノ的ナリ
学徒出陣ヲ目前ニ控エシ一夜、初メテ彼女ノ
手ヲ握リ、「君ノ眼モ口モ鼻モ、コノ手モ足
モ、ミンナ俺ノモノダ」ト短キ言葉ヲ残シ
テ、訣別セリトイウ
暗キ波間ニ投ゲタル眸ヲワレニ返シ、耳元ニ
訴エル如ク呟ク
「俺ハ死ヌカライイ　死ヌ者ハ仕合セダ　俺
ハイイ　ダガア奴ハドウスルノカ　ア奴ハド
ウシタラ仕合セニナッテクレルノカ
キット俺ヨリモイイ奴ガアラワレテ、ア奴ト
結婚シテ、ソシテモット素晴シイ仕合セヲ与
エテクレルダロウ　キットソウニ違イナイ
俺ト結バレタア奴ノ仕合セハモウ終ッタ　俺
ハコレカラ死ニニ行ク　ダカラソレ以上ノ仕
合セヲ摑ンデ貰ウノダ　モットイイ奴ト結婚
スルンダ　ソノ仕合セヲ心カラ受ケル気持ニ
ナッテ欲シインダ
俺ハ真底悲シンデクレル者ヲ残シテ死ヌ　俺
ハ果報者ダ　ダガ残サレタア奴ハドウナルノ
ダ　イイ結婚ヲシテ仕合セニナル　俺ハソレ
ガ、ソレダケガ望ミダ　ア奴ガ本当ニ仕合セ
ニナッテクレタ時、俺ハア奴ノ中ニ生キル、
生キルンダ……
ダガ、コノ俺ノ願イヲドウシテ伝エタライイ
ノダ　自分ノ口カラ繰返シ言ッタ　手紙デモ
何度トナク書イテキタ　俺ヲ超エテ、仕合セ
ヲ得テクレ、ソレダケガ最後ノ望ミダト……
シカシソレヲドウシテ確カメルノダ　ア奴ガ
必ズソウシテクレルト、何ガ保証シテクレル
ンダ
祈ルノカ　ドウシテモ祈ラズニハ居レナイ、
コノ俺ノ気持ハ本当ダ　ダガソレダケデイイ
ノカ　自分ヲ投ゲ出シテ祈レバソレデイイノ
カ　ドウカア奴ニマデ聞エテクレト、腹ノ底
カラ叫ブシカナイノカ」
荒キ語勢ニ涙ナシ　セキ込ムバカリノ切願ナ
リ　ムシロ怒リナリ
怒リヲ吐ク彼　肯キツツ言葉モナキワレ　二
人ヲ蔽ウハ、コレガ見収メノ清澄ノ月空
二人ノ足ヲ支ウルハ、再ビ踏ムコトアルマジ

キ堅牢ノ最上甲板
許婚者ナル方ヨ　君ハ類イナキ愛ヲ獲タリ
彼ガ全心コメタル祈リハ、聞キ入ラルルベシ
必ズ聞キ入ラルルベシ
彼、怒レルママニ口ヲ結ビ、凝然ト足下ノ波頭ニ見入ル
漆黒ノ海面ニクダケ散ル銀白ノ波頭
コノ眼ニ涙滲ミ、面ヲソムク　頬ヲ吹キ過グル風冷シ
好漢森少尉、明日ハ天晴ノ働キニ散リ果テン
立チツクス彼ガ肩ヲ突キ放スヤ、ワレ「ハッチ」ニ走リ寄リ、「ラッタル」ヲ馳セ降ル
最早ヤスベテハ定マレリ　決死ノ出撃ナリ
今ヤ如何ニセンスベモナシ
彼祈リ、ヒタスラニ祈リツツ散華シ、ソノ人遂ニ祈リニ応エン　他ニ途アルベカラズ
何カモドカシク、床サエ踏ミ抜カント苛立チツツ走リ続ク

直チニ配置ニ就キ敵ニ向ウ
艦隊、二十「ノット」ニ増速
艦橋ニテ作戦談ヲ聞ク
本作戦ハ、沖縄ノ米上陸地点ニ対スルワガ特攻攻撃ト不離一体ニシテ、更ニ陸軍ノ地上反攻トモ呼応シ、航空総攻撃ヲ企図スル「菊水作戦」ノ一環ヲナス
特攻機ハ、過重ノ炸薬（通常一瓲半）ヲ装備セルタメ徒ラニ鈍重ニシテ、米迎撃機ノ好餌トナル虞レ多シ　本沖縄作戦ニオイテモ米戦闘機ノ猛反撃ハ必至ナレバ、特攻攻撃挫折ノ公算極メテ大ナリ
シカラバソノ間、米迎撃機群ヲ吸収シ、防備ヲ手薄トスル囮ノ活用コソ良策トナル　シカモ囮トシテハ、多数兵力吸収ノ魅力ト、長時間拮抗ノ対空防備力ヲ兼備スルヲ要ス
「大和」コソカカル諸条件ニ最適ノ囮ト目サレ、ソノ寿命ノ延命ヲハカッテ、護衛艦九隻ヲ選ビタルナリ
沖縄突入ハ表面ノ目標ニ過ギズ　真ニ目指スハ、米精鋭機動部隊集中攻撃ノ標的ニホカナラズ　カクテ全艦、燃料搭載量ハ往路ヲ満タスノミ　帰還ノ方途、成否ハ一顧ダニサレズ
世界無比ヲ誇ル「大和」ノ四十六糎主砲、砲弾搭載量ノ最大限ヲ備エ気負イニ気負イ立ツモ、ソノ使命ハ一箇ノ囮ニ過ギズ　僅カニ片路一杯ノ重油ニ縋ル
勇敢トイウカ、無謀トイウカ
万一、沖縄上陸地点到達ノ場合ノ積極作戦モ、企図セラレタルハ言ウマデモナシ　「大和」主砲ニヨル上陸軍攻撃、コレナリ
砲弾満載量（千二百発）ノウチ、徹甲弾ヲモッテ輸送船団ノ覆滅ヲ期シ、三式弾ヲモッテ人員殺傷ヲ期ス
徹甲弾ハ重量一瓲半、艦船撃沈ノタメニ用イラレ、貫徹力大、マタ海面突入時ノ水柱ハ百五十米ニ達ス　三式弾ハ時計信管ニヨル榴散弾ニシテ、通常航空機撃墜ノタメニ用イラレ、対空射程ハ三十粁、弾片ハ六千箇ニ細分シ隈ナク四散ス　一斉射ニヨリ編隊十機撃墜ノ実績アリ

本作戦ノ大綱次ノ如シ――先ズ全艦突進、身ヲモッテ米海空勢力ヲ吸収シ特攻奏効ノ途ヲ開ク
更ニ命脈アラバ、タダ挺身、敵ノ真只中ニノシ上ゲ、全員火トナリ風トナリ、全弾打尽スベシ
モシナオ余力アラバ、モトヨリ一躍シテ陸兵トナリ、干戈ヲ交エン　カクテ分隊毎ニ機銃小銃ヲ支給サル
世界海戦史上、空前絶後ノ特攻作戦ナラン
終戦後、当局責任者ノ釈明ニヨレバ、駆逐艦三十隻相当ノ重油ヲ喰ラウ巨艦ノ維持ハイヨイヨ困難ノ度ヲ加エ、更ニ敗勢急迫ニヨル焦リト、神風特攻機ニ対スル水上部隊ノ面子ヘノ配慮モアッテ、常識ヲ一擲、敢エテ採用セル作戦ナリトイウ　アタラ六隻ノ優秀艦ト数千ノ人命ヲ喪失シ、慚愧ニ堪エザル如キ口吻アリ
カカル情況ヲ酌量スルモ、余リニ稚拙、無思慮ノ作戦ナルハ明ラカナリ

長官以下ノ第二艦隊司令部ト、各艦艦長ヲ挙ゲテノ頑強ナル抵抗ニ対シ、中央ハ直接説得ノホカナキ異例ノ事態ト認メ、特使トシテ伊藤長官ト兵学校同期、カツ親交厚キ草鹿聯合艦隊参謀長ノ派遣ヲ決定セリ

出撃直前ニ飛来セル水上機ハ、ソノ一行ノ搭乗機ナリ

参謀長ハ本作戦策定ノ枢機ニ参劃シタレバ、大和艦上ニ艦隊全幹部ヲ招集シ、口達ニヨリ以下ノ如ク作戦趣旨ノ説明ヲ行ワレタリトイウ――国家存亡ノ岐路ニアル此ノ際、海上部隊ノ最後ノ花形トシテ多年苦心演練シタル腕ヲ発揮シ得ルハ、武人トシテノ本懐コレニ過グルモノナシ

此ノ上ハ弾丸ノ続ク限リ、一騎当千獅子奮迅ノ働キヲナシ、敵ノ一艦一船ニ至ルマデコレヲ撃滅シテ戦勢ヲ一挙ニ挽回シ、皇恩ノ万分ノ一ニモ報ワレタキモノト存ズ

当隊ノ海上特攻隊トシテノ任務ハカク重大ナルモ、艦隊ノ編成ハ変則ニシテ、更ニ乗員ノ交代後訓練不充分ナリ　従ッテ各級指揮官ハ部下ノ能力把握ニツトメ、指揮統制ニ関シ超人的努力ヲモッテ細心大胆事ニ当リ、ヨク個艦戦闘力ヲ万全ニ発揮センコトヲ望ム

本作戦ノ眼目ハ基地航空部隊ノ必殺攻撃ニアルモ、敵兵力ハ厖大ナルヲモッテ、ナオ優勢ナル敵艦隊トノ会敵ヲ予期セザルベカラズ

優勢ナル敵艦船ニ対シテハ、夜戦ガ常道ナガラ、近時電測兵器ノ発達ト共ニ、敵ノ夜戦モ侮ルベカラザルモノアリ　夜戦ニオケル分散突入、一部ヲモッテスル牽制、二段斜進ノ利用ニヨル誘致戦術等ニツキ、周到ナル準備研究ガ望マシキモ、決定的打撃ハ夜戦ニ継グ昼戦ニオイテ、主隊ヲ中心トスル集団肉迫攻撃ニヨルヲ肝要トス――

伊藤長官ガ疑念ハ、美辞麗句ノ命令ノ背後ニアル「真ノ作戦目的」ハ何カニ集中シ、「一億玉砕ニ先ガケテ立派ニ死ンデモライタシ」トノ最後的通告ヲ得テ、ヨウヤク納得サレタリ

更ニ長官容ヲ改メ、「作戦ノ結末ヤ如何　征途ノ途次ニ甚大ナル損害ヲ蒙リタル場合、収束ハワガ決断ニ任セラレタルヤ」ト質問セルニ、参謀長答ウ「従来トカク独断専行ニ欠クルトコロアリ　全般ノ作戦ヲ考エ情況変化ニ即応シ、指令ヲ待タズシテ最善ノ処置ヲ講ジ得ル如ク、予メ腹案ヲ練リオカレタシ　モトヨリ非常ノ際ハ、聯合艦隊司令部トシテモ臨機処断ノ用意アリ」ト

聯合艦隊司令長官ノ壮行ノ詞ニアル如ク、真ニ帝国海軍力ヲコノ一戦ニ結集セントスルナラバ、「ナニ故ニ豊田長官ミズカラ日吉ノ防空壕ヲ捨テテ陣頭指揮ヲトラザルヤ」ト若手艦長ガ特使一行ニ詰問セルハ、特攻艦隊総員ノ衷情ヲ代弁セルモノトイウベシ

天号作戦ノ成否如何　士官ノ間ニ激シキ論戦続ク

必敗論圧倒的ニ強シ

「大和」出動ノ当然予想セラルベキ諸条件ノ符合

米軍ノ未ダカツテナキ慎重ナル偵察

情報ニヨリ確認セル如ク、沖縄周辺ニ待機セル強力カツ大量ノ機動部隊群

大海戦ニ前例ヲ見ザル航空兵力ノ決定的懸隔

併セテ発進時期、出動径路ノ疑問

提灯ヲ提ゲテヒトリ暗夜ヲ行クニモ等シキ劣勢トイウベシ

豊後水道ニテ逸早ク潜水艦ニ傷ツカン

アルイハ途半バニ航空魚雷ニ斃レン（青年士官ノ大勢ヲ占メタルコノ予測ハ鮮カニ的中セリ）

痛烈ナル必敗論議ヲ傍ラニ、哨戒長臼淵大尉（一次室長、ケップガン）、薄暮ノ洋上ニ眼鏡ヲ向ケシママ低ク囁ク如ク言ウ

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ　負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ

日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過ギタ　私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワッテ、本当ノ進歩ヲ忘レテイタ　敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウ

シテ日本ガ救ワレルカ　今目覚メズシテイツ救ワレルカ　俺タチハソノ先導ニナルノダ日本ノ新生ニサキガケテ散ル　マサニ本望ジャナイカ」

彼、臼淵大尉ノ持論ニシテ、マタ連日「ガンルーム」ニ沸騰セル死生談義ノ一応ノ結論ナリ　敢エテコレニ反駁ヲ加エ得ル者ナシ

出撃気配ノ濃密化トトモニ、青年士官ニ瀰漫セル煩悶、苦悩ハ、夥シキ論争ヲ惹キ起サズンバヤマズ

艦隊敗残ノ状スデニ蔽イ難ク、決定的敗北ハ単ナル時間ノ問題ナリ――何ノ故ノ敗戦ゾ如何ナレバ日本ハ敗ルルカ

マタ第一線配置タル我ラガ命、旦夕ニ迫ル――何ノ故ノ死カ　何ヲアガナイ、如何ニ報イラルベキ死カ

兵学校出身ノ中尉、少尉、口ヲ揃エテ言ウ「国ノタメ、君ノタメニ死ヌ　ソレデイイジャナイカ　ソレ以上ニ何ガ必要ナノダ　モッテ瞑スベキジャナイカ」

学徒出身士官、色ヲナシテ反問ス「君国ノタメニ散ル　ソレハ分ル　ダガ一体ソレハ、ドウイウコトトツナガッテイルノダ　俺ノ死、俺ノ生命、マタ日本全体ノ敗北、ソレヲ更ニ一般的ナ、普遍的ナ、何カ価値トイウヨウナモノニ結ビ附ケタイノダ　コレラ一切ノコトハ、一体何ノタメニアルノダ」

「ソレハ理窟ダ　無用ナ、ムシロ有害ナ屁理窟ダ　貴様ハ特攻隊ノ菊水ノ「マーク」ヲ胸ニ附ケテ、天皇陛下万歳ト死ネテ、ソレデ嬉シクハナイノカ」

「ソレダケジャ嫌ダ　モット、何カガ必要ナノダ」

遂ニハ鉄拳ノ雨、乱闘ノ修羅場トナル「ヨシ、ソウイウ腐ッタ性根ヲ叩キ直シテヤル」臼淵大尉ノ右ノ結論ハ、出撃ノ直前、ヨクコノ論戦ヲ制シテ、収拾ニ成功セルモノナリ

死生ノ寸刻

松本少尉ト艦橋後部ニテ遭ウ　顔面蒼白、指ヲアゲテ囁ク「俺タチモ時間ノ問題ダナ」

指サスハ、艦ノ後部、最モ水位高キ最上甲板、イワユル乾舷ナリ

傾ケル左舷ヨリ、波ヒタヒタト寄セアガリ、漣波立テテコレヲ洗ウ

浮城ノ如シ、ト讃エラレタルカノ乾舷

波、乾舷ニカカレバ、顚覆最早ヤ免レ難シ

彼、絶望ノ証拠ニ戦ケルカ　心優シキ詩人、松本少尉　スデニミズカラノ過情ニ斃レタルカ

配置ハ数階下段ノ第二艦橋ナレバ、ソコヨリ友ヲ求メテキタレルナラン

ワレニ楽観ノ声ヲ期待セルカ　イカナル悲境ヲモ前ニ、激励ノ言ヲ求メテキタレルカ

ワレコノ時、ナオ夢想ダニ「大和」ノ終熄間近キヲ思ワズ

理性ハツトニコレヲ悟レルモ、感性ハヒトリ、イワレナキ昂リニ燃エ立ツ

長クハゲシキ緊張ノ故カ　ハタ巨艦ノ雄渾ニ魅了サレタルカ

オヨソ巨大ナル存在ノ魔力ハ、ソコニ属スル者ノ心魂ヲ奪イ、絶対ノ信頼ト愛着ヲ植附ク

艦橋ノ生存者十名ヲ出デズ

倉皇トシテ脱出セントスル者アリ　イズレモ佐官級ノ古強者ナリ

殆ンド水平ニ近ク傾ケル「ラッタル」ヲイザリツツ、振向キテ我ラヲヌスミ見ル

配置ヲ去リテ何処ニ行カントスルヤ　他ニフサワシキ死処ノアリトイウヤ

去ル者ハ去ルベキナリ　タダコノ得難キ死生ノ寸秒ノ間、彼ラガ心中些カノ悔恨ナキヤヲ想ウ

我ラ幸イニシテコノ時ニ安ンズ　何ニカ感謝スベキ

アタリイヨイヨヒソヤカナリ

戦イノ終末ヲ急グ破壊音止マザルモ、忘我ノワガ耳朶ニ触ルルハ柔ラカキ静寂ノミ

ワガ眼ニ映ルモノスベテニ白光射シ、眸、初メテモノ見ルコトヲ知リシ如キ愕キナリ

瞳孔、ソノ底マデモ純ミ切レルカ

空間ワガ眼前ニ停止シ、時間ワガ周囲ニ凍結ス
ワレ、ワレニシテ、ワレニ非ズ
コノ間、僅カニ数刻

再ビ胸奥ヨリノ声、殆ンド肉声ヲモッテ迫ル
「オ前、憐レムベキモノ　遂ニ空シク死ノ軍門ニ降ルカ
死ニ行クオ前ノ血肉タルモノ、アリヤナシヤ顧ミテ、ミズカラニトルベキモノノ、一片トテアルカ」
「待テ、待チ給エ
ワガ半生ハムシロ恵マレシモノ——
肉親ノ熱キ絆（キズナ）　スグレタル師友　快キ環境
豊カナル希望　乏シカラヌ資質——
コレラヲモッテ足ル　ワレハ仕合セ者」
声「ソノイズレニ真ノオ前アリヤ
ソレラスベテヨリ、死ニ行クオ前ニ加ウベキ何モノノアリヤ　アラバ示セ」
「……イナ、ソレノミニ非ズ　更ニ輝クモノ、消エザルモノ……」
声「何ゾ」
「カノ数々ノ想イ出　美シク、悔イルナキ……」
声「真実カ」
「アア如何ナルヤ　コノ不安　ナニ故ニ　ワレカクモ苛立（イラダ）ツカ」

声「サテ、オ前、謙譲ノ喜ビト苦シミヲ知レルヤ　心ニ頭ヲ垂レシコトアリヤ」
「アア謙譲カ……　ワレ不遜（フソン）ノヤカラナリ
許シ給エ　サレド　辛ウジテ謙譲トミズカラ信ジ得ル行為ノ、唯一ツアリシト答ウルコトヲ、得サセ給エ」
声「ソノ時、真ニ謙虚ナリシカ　オ前何ニ対シ、マタ　如何ニ、己レヲ屈シタルカ」
自問ニ堪エズ　憤然トシテ
「ヤメロ　詰問スルナ　ワレハミズカラヲ裁ク」
声、嘲笑ヲ含ミ
「ミズカラヲ裁クカ　呵々（カカ）
愚カ者　死臭ニ捲（マ）カレツツミズカラヲ裁クトハ　コノ時ニ及ビナオミズカラヲ欺クトハ」
「許セ　コノ些（イサ）カノ安逸ヲモ奪ウナ
沈ミ行クハ何処（イズコ）
……
殺シ給エ　底ナキ戦慄（センリツ）ヨリ救イ給エ
殺セ」

最終処置

艦長「御真影ノ処置ハドウカ」
責任者、服部九分隊長ヨリ、走リ書ノ応信、伝令ノ中継ニテ届ケラル

私室ニ御真影ヲ奉持シテ、内側ヨリ扉ニ鍵シタルト　身ヲモッテ護ル、コレニマサリテ確実ナル手段ナシ
見レバ、航海長（中佐、操艦航行ノ責任者）、掌航海長（中尉、ソノ輔佐（ホサ））向イ合ッテ「ロープ」ヲ手繰リツツアリ
膝ヲ交互ニ組ミ合セ、肩ヲブツケ合ッテ、互イノ足腰ヲ羅針儀ニ縛リツケントス
万一浮上セバ、恥辱タルノミナラズ、四肢自由ノママ水中ニ没スレバ、生理的ニ浮上ヲ求メモガクコト必定ニシテ、苦痛ニ堪エザルナリ
コレヲ見テ、ワレモ自然ノ動作ニ腰ヲマサグル　カネテ用意ノ「ロープ」アリ　特攻作戦ノ終末ノカクアラントハ、充分予期セルトコロナリ
「何ヲスルカ、若イ者ハ泳ゲ」森下参謀長怒声、鉄拳ヲマジエテ凄（スサ）マジキ権幕ナリ　端ヨリ殴リツケラル
意ヲ翻シ「ロープ」ヲ捨テテヤムナク命ニ従ウモ、憤懣（フンマン）消エヤラズ
歯ヲ噛ミクダク思イニアタリヲ睨（ニラ）ム——今ニシテ脱出セントハ、何ノタメノ特攻出撃ゾヤ
何ノタメノ自決用「ロープ」ゾヤ
真実ハ数分前、幕僚イザリ寄ル最後ノ協議ニ、「作戦中止、人員救出ノ上帰投」ノ決定

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com